



# そよかせ通信

●特別寄稿

いよいよ始まる新学習指導要領での生活・総合 ..... 1

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 田村 学



実践と理論

地域素材を教材化するポイント ..... 7

國學院大學栃木短期大学教授 田中 力

「ふるさと学校」での学びを通して、「ふるさと作手」を愛する子を育てる ..... 11

—みる力・ひびきあう力・発信する力を手がかりとして—

愛知県新城市立開成小学校

子どもの育ちと学びをつなぐ  
保幼小連携をめざして ..... 15

～がっこう だいすき～

兵庫県姫路市立手柄小学校教諭 西口 広美

## 教育出版

# いよいよ始まる 新学習指導要領での生活・総合



文部科学省  
初等中等教育局  
教育課程課教科調査官  
**田村 学**

## ■ 始まる新学習指導要領

いよいよ新学習指導要領が全面的に実施される年になった。各学校においては、十分な教材研究、綿密な指導計画の作成などが行われ、準備に怠りのないところだと思う。

平成21・22年度のいわゆる移行期間においても、全国各地で熱意溢れる実践者が、生活科や総合的な学習の時間において先進的な教育実践を展開してきた。そこには、実に生き生きとした子どもの姿、真剣に考える子どもの姿、友達や地域の人と力を合わせて学ぶ子どもの姿が見られた。

## □ 生活科・総合的な学習の時間における子どもの姿

1年生の生活科の授業でのことである。いわゆる成長単元。クラスの子ども全員で1年間の成長をカードに書き、振り返っていった。黒板は、できるようになったことや成長したこと、役割が増えたことなどのカードで溢れんばかりになった。そんな学習活動を通して「ほくって、こんなにできるようになったんだね。」と、発言した子どもがいた。このように自己の成長を肯定的にとらえ、さらなる成長に目を輝かせる姿こそ、私たちが期待する子どもの姿であろう。

また、別の子どもは、「たくさんカードをかいてきて、いちばんだいじなのはこころなんだなあとおもいました。」と記した。学級における学び合いを通して、子どもは多くのことに気づき、その質を高めていく。一人ではなく、みんなで学習をすることで、互いの違いやよさを響き合わせていくことになる。多様な子どもの

いる教室での学習は、こうして豊かに確かに子どもの成長を生み出していく。一人一人の子どものよさや可能性を信じ、それを生かす生活科は、すべての学習活動の基盤となる子どもの育ちを担っている。

総合的な学習の時間でも、充実した学習活動が展開されてきた。特に、総合的な学習の時間においては、新学習指導要領が先行的に実

施されていることもあり、全国的に意欲的な実践が広がりつつある。また、その成果も大きい。

いくつかの学校で「総合って、どんな学習？」と、子どもに問いかけてみた。答えてくれた子どもの言葉から、私たちは多くのことを学ぶことができる。

「総合は、教科書で勉強するのではなく、地域の人と一緒に勉強する時間。協力することも楽しい。だから、総合が好き。」

「総合は、地域のことを学ぶこと。自分で考えて、自分で決めて、自分で実行する時間。」

こうした言葉からは、総合的な学習の時間が、身近な地域や生活の場をステージに、実体験を通して展開されていることがわかる。これまでの教科書を中心とした受け身の学習観が、自分から探究的に学ぶ学習観へと変わろうとしていることがうかがえる。

また、次のような言葉も聞かれる。

「総合って、みんなで力を合わせて問題を解決すること。私は、そんな総合が大好き。」



「教科は教えてもらう学習。総合はそれを生かして自分で取り組む学習。みんなで話し合ったり調べたりする学習は楽しい。」

この言葉からは、総合的な学習の時間では、互いに協力したり、自主的に取り組んだりすることが自然と学ばれていることがわかる。協同的に学ぶことの楽しさを実感する子どもの姿が垣間見える。

さらに次の言葉には、学習することの本質に気付いた子どもの姿を感じることができる。

「総合は、世の中を知ること。それも、楽しく知ること。」

「総合は、答えのない問題について考える時間。だから楽しい。」

生活科も総合的な学習の時間も、子どもが実社会や実生活とかかわりながら、そこで活用できる能力を育成し、自立した子どもを育てようとしている。優れた実践においては、期待する子どもの姿が具現されていることを、実際の子どもの姿から実感することができる。



## ㊦ 体験の充実と言葉の重視

生活科においても総合的な学習の時間においても体験活動を行うことが欠かせない。なぜなら、私たちは体験を通して情報を入手し、そのことから世の中のさまざまな物事を認識し、身のまわりの多くのできごとを学んでいくからである。特に低学年の時期においては、文字言語や音声言語によって理解する能力が十分に発達していない。だからこそ、目で見たり耳で聞いたりするだけではなく、実際に触ってみたり、おいをかいてみたり、味わってみたりすることが欠かせない。

「赤ちゃんの脳は肌にある」と言う人がいる。幼子は、なんでも口に入れて確かめようとする。その姿が私たちに物語るように、子どもは身体全体を使って、身のまわりのものやことを実感的に理解しようとするのであろう。

したがって、生活科においては、「具体的な活動や体験を通す」ことを最優先し、ますますの充実に向けて取り組むことを忘れてはならな

い。それは、体験活動をしているときの子どもの姿を見れば明らかである。その表情は生き生きと晴れやかであり、瞳はきらきらと輝いている。声をかけることも<sup>はばか</sup>憚られるくらいに集中して没頭していたり、次々と言葉を発し自ら友達とかかわったりする姿が見られる。子どもにとって体験することは、本物の学びを実現するために欠かすことのできない重要な要素なのであろう。

しかし、ただ単に体験すればよいというわけではない。身体全体を使った諸感覚をはたらかせる体験活動を行うことはもちろん、その体験活動がねらいに迫るものであるのか、低学年の発達にふさわしいものであるのか、地域や学校の特色を生かしたものであるのかなどを十分に視野に入れていくことが大切になろう。

一方、体験活動を確かな学びに高めていくためにも言葉の存在を無視することはできない。なぜなら体験活動の場は、子どもにとって歓喜や興奮の場だからだ。例えば、まち探検でたくさんのことを発見しびっくりしたり、栽培していたトマトを食べてその味に感激したり、育てていたザリガニが死んでつらい思いをしたりする。こうしたかけがえのない体験活動を、子ども一人一人の学びとして仕立てあげていくことが求められている。そのためにも、体験とともに言葉を意識することが大切になろう。

カタツムリを育ててきた子どもが、その飼育の様子を詩にまとめた。

この詩から、カタツムリのことを考え、毎日

## いよいよ始まる新学習指導要領での生活・総合

カタツムリ

春

カタツムリを だいに だいにそだてた。  
かわいくて かわいくて しょうがない。

夏

えさを まいにちあげて しっかりそだてたら  
なんと たまごをうんだ！

白い糸を はきながら

いっばい いっばい うんだ！

わたしは ヒーくとミーちゃんに こういった。

「ミーちゃん ヒーくん うんでくれてありがとう。」

したら また たまごを うんだ！

秋

やっぱり だいに そだてていると

また また たまごをうんだ！

わるいことはないけど

いっばい ありすぎちゃった。

そして ふつうに そだてていたら

また また 4かいめのたまごだ！

わたしは とっても とっても

たいへんな きもちになった

いま

わたしは いっばい いっばいのカタツムリに  
かこまれて くらしている。

欠かさずに世話をしてきたことが想像できる。卵が産まれた瞬間の嬉しさ、その驚きも伝わってくる。継続的な飼育の中で育て方も上達し、「ふつうに」育てていても卵が生まれるほどに技能は上達している。そんな中で、かけがえのない大切な卵を育てることの責任の大きさに「たいへんなきもち」にもなっている。まさに、命の大切さを実感しているのであろう。生命の存在をカタツムリの飼育の中で感じ取り、言葉にすることで自らの生命観を確かなものとしている。

実際に飼育活動を行う中で感じたり考えたりしたことを、少しだけ冷静に、ちょっとだけ落ち着いて振り返り、言葉にして紡ぎ出すことで、飼育活動の中で得られた価値ある体験が、確かな学びに高まっていることを感じさせる。

このように、言葉は体験をさらに充実させてくれるものでもある。

### 4 探究的に学ぶ

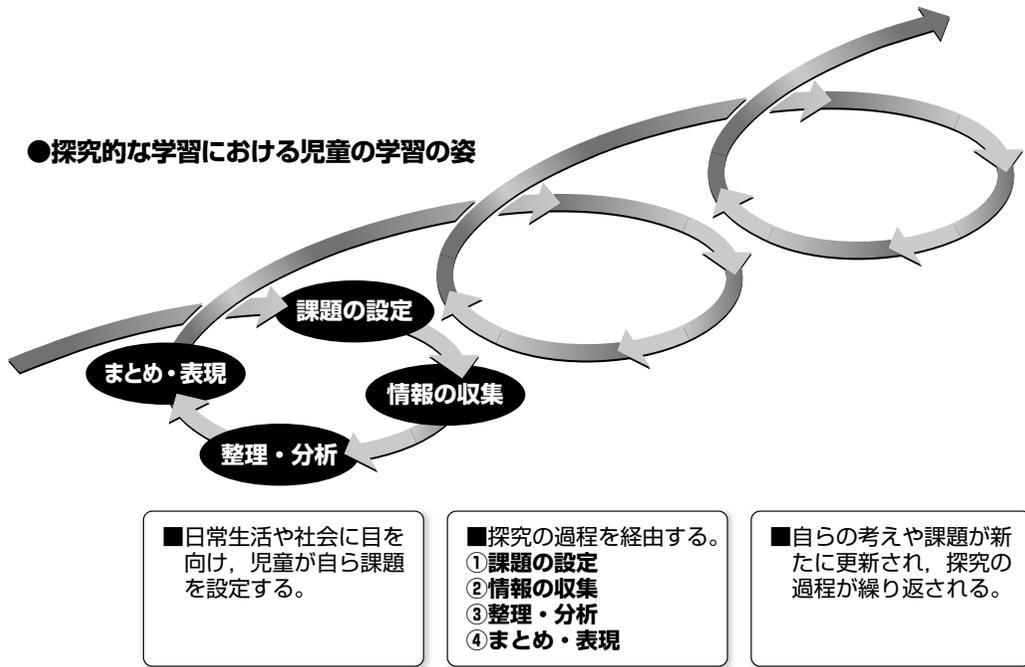
体験活動や言語活動は、それが子ども自身の思いや願いの実現に向けた学習活動の中に位置付くことでさらなる価値をもつ。あるいは、目の前で起きている問題状況の解決に取り組む中で行われることで効果を発揮する。特に、総合的な学習の時間では、問題解決的な活動が発展的に繰り返される一連の学習活動となることが欠かせない。そして、この探究の過程に体験活動と言語活動を適切に位置付けることが大切になる。

例えば、実際に川に出かけて、川の上流や下流の汚れを比較する。子どもは、

「どうしてこの川はこんなに汚れてしまったのだろう。」

「この川をきれいにするにはどうすればよいのだろう。」

## ●探究的な学習における児童の学習の姿



と問題状況の把握が、子どもの課題設定につながっていく（①課題の設定）。

川の汚れの原因を探るためには、川の水質や生物を調べたり、昔の川の様子をインタビューで明らかにしたりすることが考えられる。パックテストで調べたり、指標生物を探したりして調査結果として情報を集めることなどができる。また、地域に住むおじいちゃんやおばあちゃんを訪ねて、昔の川の様子を聞き取り調査することもできる（②情報の収集）。

こうして集めたたくさんの情報を表やグラフに整理してまとめたり、その結果から川の汚れの原因を考える話し合いをしたりする（③整理・分析）。

そして、自分の考えをチラシやポスターにして河川浄化の呼びかけをしたり、実際にゴミ拾いの活動に参加したりしていくことが考えられる（④まとめ・表現）。

このような探究のプロセスを意識した学習活動を行うことで、子どもは各教科の知識や技能

を活用し、それを確かなものにしていくとともに、身近な問題を解決するために真剣になって問題解決的な活動を実行していくことになる。

これまでの総合的な学習の時間は、ややもすると体験活動だけが目的となり、そのことによってどのような学びが実現しているのかが問われてこなかった。子どもが日常生活や社会における問題状況を本気になって解決しようとする中に、ものや人とかかわる体験活動をし、話し合ったり伝え合ったり考えたりする言語活動を位置付けることを大切にしたい。

## 目 PISAの結果

先日、2009年実施のPISAの結果が発表された。学力低下に対する不安を払拭する成績だった。懸案だった読解力にも下げ止まりの傾向が見え、さまざまな施策の成果との評価を受けている。

この結果をどう受け止めるべきか。データ分析の中で忘れがちなのが、2009年調査を受けた

# いよいよ始まる新学習指導要領での生活・総合

## ●2009年PISAの結果 (2010/12/7発表)

読解力	498 →	<b>520</b>
数学的リテラシー	523 →	<b>529</b>
科学的リテラシー	531 →	<b>539</b>
参加国・地域	57 →	<b>65</b>

### 調査の概要

\* 数値は、前回(2006年)との比較

- 調査対象：15歳
- 実施年：2000, 2003, 2006, 2009年
- 調査内容：読解力, 数学的リテラシー, 科学的リテラシーなど

## ●「探究のプロセス」と「読解のプロセス」の対比

### 総合的な学習の時間

#### 探究のプロセス

- ①課題の設定
- ②情報の収集
- ③整理・分析
- ④まとめ・表現

### PISA型読解力

#### 読解のプロセス

- 情報へのアクセス・取り出し
- 統合・解釈
- 熟考・評価

世代(PISAは15歳を対象としている)が、総合的な学習の時間を小学校3年生から学んできた世代であるということである。平成14年の学習指導要領全面実施の年に、彼らは小学校3年生だった。極端な言い方をすると、「生きる力」を志向した新しい学力観の考え方のもと、総合的な学習の時間をフル規格で学んできた世代が、国際標準の学力調査において結果を出したともいえる。おそらく、生活科や総合的な学習の時間に代表される探究的な学習こそが、PISAに代表される国際標準の学力、21世紀型学力の育成に寄与するものと推測することができる。

## ㊦ 21世紀型学力を育成する探究

社会の変化が激しさを増し、キャッチアップからイノベーションの時代へと変化してきている。さまざまな分野においてICTが活用され、情報は瞬間に世界を駆け巡る時代になってきた。また、グローバルに人やものが行き交う社会になってきた。

20世紀の知の巨人といわれたドラッカーは、こうした時代を「知識基盤社会」と言った。これまで、社会の基盤を資本や労働などが担ってきた。しかし、新しい時代は知識や情報がそ

れに取って代わる。しかも重要なことは、そうした知識や情報は常に更新され続けるという点だ。こうした新しい21世紀を迎える中、社会が求める人材も大きく変わってきている。そのためにも受け身で知識注入型の教育から、主体的で新しい知を創造していく探究型の教育が求められている。

実社会が求める人材としては、例えば、アクション・シンキング・チームワークなどとして経済産業省が示している「社会人基礎力」、内閣府が示す「人間力」、厚生労働省の「就職基礎能力」、中央教育審議会答申に見られる「学士力」などが具体的にイメージできる。政府の示す新成長戦略にも「課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力」などの実社会や実生活で活用できる能力の育成が期待され示されている。こうした実際の社会において活用することが求められる21世紀型学力は、生活科や総合的な学習の時間のような探究的な学習の場でこそ育成することが可能であり、その必要性和重要性は、今後いっそう高まるであろう。

今こそ、生活科と総合的な学習の時間の充実が求められているのである。

# 地域素材を教材化するポイント

國學院大學栃木短期大学教授  
田中 力

## ■ 地域素材を教材化する意味

生活科では、子どもの身近な地域が学習の場であり、学習の対象である。子どもは地域にとび出し、直接対象とかがわかることによって学習を深めていく。身近な地域を学習の場とし、学習の対象としていくことの意味を次のように考えることができる。

第1は、活動を通して、地域への愛着の念を深めていくことを期待できるということがある。自分が住む地域への愛着の念を深めることは、子どもの生活の基盤を強固なものにしていくことになる。

第2は、学んだことを生活の中に生かしていくことができるということである。身近な地域で学んだことは、ただそれだけで終わるということではなく、日々の生活の中で生きてはたらくことが期待できる。

第3は、身近であるだけに、何度でも繰り返しかかわることができるというよさがある。かかわることを繰り返す中で、子どもと対象との間につながりができてくる。無関係だった存在との間に次第に関係ができてくる。気にならなかった存在が、自分にとってかけがえのない存在へと深化していく。かけがえのない存在が多くなっていくことは、子どもの世界を豊かにしていくことになる。

地域素材を教材化するためには、教師は子どもと同じ生活者の目を持ち、地域を歩き回って、子どもにとって価値ある素材を見つけ出し教材化していくことに努めなければならない。

教材化にあたっては、地域のすばらしさを教材化していくことが前提となるが、一見マイナスと見られるものの中にも、見方を変えるとプラスになるものもあることに留意したい。近年、北海道では寒さを、沖縄では暑さをマイナス面の克服としてとらえるのではなく、プラス思考で見直していこうとする動きが高まっている。地域素材を教材化する際にも、そうした考え方を取り入れていき、地域を広い視野

から見ていくようにしたい。自然が乏しい都会であっても、舗装された道路の道端に咲く可憐な花は、自然の営みをあざやかに見せてくれる。

## ■ 地域への愛着を深める

身近な地域を調べる素材には、自然、土地利用、公共施設、交通、史跡、人、行事・催し物などがあるが、これらの素材をすべて網羅する必要はない。地域の実態に即して教材化を図っていくようにすることが大切である。

店や公共施設などを教材化する際には、観察するだけでなく、仕事に携わっている人とかかわる活動ができるかどうかポイントとなる。人とかかわることによって、親しい人が増えていく。親しい人が増えていくことは、自分が住む町をもっと好きになっていくための第一歩となる。



「手づくり△サンドイッチの元祖の店」って何だろう

「手づくり△サンドイッチの元祖の店」と書いてある看板がある。どういうことなのだろう。店の人に聞いてみないとわからない。インタビューしてみよう。今では、三角形のサンドイッチはどこでも見かけるが、かつてはこの店の特許だった。この店のご主人が、四角いサンドイッチでは中身が見えないからと、斜めに切って具を見えるようにしたら、爆発的にヒットしたという。そんな話を聞いた子どもたちは興奮して報告に来た。思わぬ達人が身近にいたことがうれしかったようだ。



町の人にインタビューをする

銀行に行った子どもたちは応接室に通され、支店長さんにインタビューしてきた。消防署へ行った子どもたちは、署員のかたに消防署の内部をくわしく見せてもらうことができて大満足だった。薬屋へ

行った子どもたちは、ジュースをサービスしてもらって、「先生、ないしょだよ」と、こっそり教えてくれた。

始めからうまくいかなくては、子どもたちは自信を失ってしまう。1回目のインタビューでは、グループがどこへ行ってインタビューするかを事前に決めておき、そこへは前もってお願いしておくようにした。

事前に頼んでいたこともあって、どのグループも和やかにインタビューができ、子どもたちはインタビューの楽しさを十分に感じたようだった。

2回目のインタビューでは、事前に連絡をとっておいたほうがよいと思われるところ（警察署、病院など）以外は子どもたちにまかせることにした。

自分の住んでいる地域を好きになるためには人の存在が大きいの。会うとうれしい人、いつも元気にあいさつを交わす人、一緒に何かをしてくれる人…。そうした人が身近な地域に増えれば、子どもは地域への愛着を深めることになる。

#### ●教材化のポイント

- 地域への愛着を深めることができるものであること

## ㊦ 視点を与えて地域を見る

毎日の生活を送っている身近な地域であっても、見えていないものがある。見えていないものを見るようにしていくには、視点を与えて地域を見るようにさせるとよい。

「わたしたちの町は、『人にやさしい町』になっているだろうか。」と問いかけた。子どもたちは、一瞬「えっ?」という感じになったが、「なっている」「なっていない」とにぎやかになった。

そこで、「人にやさしい町」をキーワードに分解して、何を意味しているかを考えることにした。「人」については、「体の不自由な人、お年寄り、外国人、困っている人」などが、「やさしい」については、「人を助けてあげる、道を教えてあげる、席をゆずってあげる、駅のエスカレーターの車椅子用リフト、駅の点字の運賃表、点字ブロック」などが出されてきた。「やさしさ」について出されたものには、「もの」にかかわるものと「心」にかかわるものがあることにも気付いていった。

この課題は子どもの意表を突くものであり好奇心を刺激するものであったようで、早速、グループに分かれて「町のやさしさ」を探す探検に出かけることになった。子どもたちは町の中を探検して、やさしさが込められた「もの」を探したり、人に話を聞いたりして、さまざまな「やさしさ」を見つけ出してきた。

点字ブロック、音響信号機、電話ボックスの中の工夫、車椅子の看板、工事中の合図、カーブミラー、英語の看板、スクールゾーン、ガードレール、シルバー信号機、エレベーターの中の鏡、筆談用具…。「点字ブロックの上に、じてん車が、よくとめてあります。どうしてそこに点字ブロックがあるのかということや、それをつかう人のきもちを考えてもらいたいと思います。ぷんぷん!!」

人にやさしい「もの」を備えつけても、それを生かす人の「心」が大切であることにも気付いていったのである。

#### ●教材化のポイント

- 子どもの学ぶ意欲を喚起する魅力的な課題であること
- 具体的な活動を通して、新たな気づきを得られるもの

### 四 多様な人々とのかかわり

学習指導要領の「指導計画と内容の取扱い」に、「具体的な活動や体験を行うに当たっては、身近な幼児や高齢者、障害のある児童生徒などの多様な人々と触れ合うことができるようにすること」とある。

核家族化、少子化、地域共同体の崩壊といった子どもを取り巻く状況の変化は、子どもが多様な人々とかかわる機会を奪っているといえる。多様な人々とかかわる経験が乏しい子どもたちに、「他者への温かいまなざしをもて」といっても無理なことであろう。多様な人々と具体的にかかわる活動を通してこそ、人とかかわる力を伸ばしていくことになるとともに、多様な人々とともに生きていこうとする態度を育てることになると考える。

多様な人々とのふれ合いについては、地域の実態を考慮し、聾学校（現在は聴覚特別支援学校）の子どもたちとの交流を行うことにした。障害のある子どもを「かわいそう」な友達として、「助けてあげよう」というような感覚で交流することは避けたいと考えた。聾学校の子どもたちとは対等な立場で交流できることが期待できた。また、こちらからの一方的な都合による交流ではなく、双方に学びが成立する交流となることも期待できた（身近な幼児や高齢者と交流する際にも、こうした配慮が必要であろう）。

「なかよくなるには、いろんなことをしゃべってみることだと思います。はっきりとお口を開けて、話していこうと思います。お口をじーっと見て、な



ゲームをして親しくなる

にを言っているのかわかるようになりたいです。」

「Eちゃんとずっと手をつないで、ずっといっしょだった。とてもうれしくてたのしかった。わたしのひきだしをみて、算数の教科書をみて、

『????』

なんて言っているのかな？

あたまのなかが『?』になった。

『も、う、い、ち、ど、いっ、て』

と言ったら、

『おなじ』

と言っていた。教科書もおなじだったし、Eちゃんの言っていることがわかって、とってもうれしかった。」

互いのことを伝え合うのはスムーズに進むものではない。一生懸命話してくれるのだが、よく聞き取れないことも多い。しかし、子どもたちは、相手の口の動きをしっかりと見て、何を言っているのかを聞き取ろうとしていたし、自分が話すときも大きな口を開けて話すように努めていた。互いに、相手が何を言っているのかを知りたいと思い、また、自分の思っていることを相手に伝えたいと願う気持ちがあり、相手の立場に寄り添っていこうとすることによって、子どもたちは少しずつ壁を乗り越えていくことができた。困難を伴う活動であっただけに、話してわかり合うことの大切さとすばらしさを知ることとなったのである。

### ●教材化のポイント

- 伝え合うことのすばらしさを実感できる交流であること

## 目 自然とのかかわり

春、<sup>みしょう</sup>実生のどんぐりを見つけた。小さな緑の芽が出ている。夏になり、苗木は大きな葉をたくさんつけるようになった。秋になると紅葉した葉はすべて落ち、針金のように細い茎が1本立っているだけの姿となった。枯れてしまったのだろうか。半ばあきらめていたのだが、春が近づいたとき、針金のような茎の先に再び芽ができてのを見た時のうれしさ。どんぐりは、新たな春に育つ力を自らの内部に蓄えていたのである。

これは、実生のどんぐりを継続的に見続けることによって見えてきた世界である。

自然とは継続的にかかわっていくことができるようにしたい。継続的にかかわることで、四季のうつろいを感じ、自然のすばらしさや不思議さが見えてくる。空き地でも公園でもよい。子どもたちが継続的にかかわることができる場を探し、そこでどのような活動ができるのかを吟味することである。



夏一ザリガニを釣る



秋一落ち葉と木の実を集めるゲームをして親しくなる

1年生では、季節にどっぷりとつかり、その季節のよさを全身で感じ取ることができるような活動を取り入れていくようにしたい。

2年生では、季節の変化を感じ取ることができるようにしていきたい。それには、次の季節が訪れる少し前に、次の季節を探す活動を行うようにするとよい。例えば、冬に春を探す活動を行うのである。「2月20日。今日、ゆうびんきょへ行った帰りに、お店で春を見つけました。『ひなまつり』の『あられ』や『あめ』を売っていたからです。(あーあ、わたしもほしいなあ)と思いました。」

「小学校に行く時にうめの花を見つけました。花はこいきれいなピンク色で、たくさんさいていました。」

「町の中のかねは5時になると、なり出します。前はかねがなる時まっくらだったのに、今は、少し明るくなってきました。これも春が近づいているからかなあ。」

こうした視点を与えて活動することによって、季節感が鋭くなるとともに、授業を離れた場でも季節の変化を探して活動を広げていくことになる。

### ●教材化のポイント

- 継続的にかかわることができるものであること
- 自然のすばらしさや不思議さを実感できるものであること

# 「ふるさと学校」での学びを通して、 「ふるさと作手」を愛する子を育てる

—みる力・ひびきあう力・発信する力を手がかりとして—

愛知県新城市立開成小学校

## ■ はじめに

「生きる力」をもったたくましい人間の育成をねらいとした学校週5日制で、休みとなった土曜日の1日は、「家庭と地域で子どもたちが学ぶ」ことが期待された。今回の指導要領改訂でも「生きる力」の理念は継続・強調され、学校・家庭・地域における理念の共有が重視されている。しかし、子どもたちの休日の過ごし方をみると、習い事や家の中で過ごすことが多く、実体験から学ぶことができる恵まれた環境にありながら、自然やふるさとの人々との交流をしていない状況にあった。そのため、学校が積極的に家庭・地域と連携し、「ふるさと学校」として教育活動を見直し、自然のすばらしさや先人のもつ生活の知恵・文化を伝え、将来ふるさとを担っていく子どもたちを育てていきたいと考えた。

そのための手立てとして、次の2つを柱として取り組んでいる。

### ● 家庭・地域・学校との連携を深める

- 生活科や総合的な学習を中心に「ふるさと先生」の活用を図り、地域の人・自然・歴史文化を学ぶとともに、ふるさとを大切にする生き方を学ぶ
- 「ふるさと講座」や地域に出かける活動を通して、ふるさとの人々との交流を図る

### ● 個を強くする

- みる活動、書く活動を通して、自己の考えを深める
- 実体験にもとづいて根拠をもって話し合い、考えを深める（ひびきあう）
- 学んだことをもとに、ふるさとのためにできることを考え、発信したり貢献したりする

## ☑ 家庭・地域・学校との連携を深める

### (1) 「ふるさと先生」との学び

2年生の生活科では、ゴーヤ栽培をしている学区の方をふるさと先生（子どもたちはゴーヤ先生と呼ぶ）としてお願いした。先生は、時間があれば学校へ出向いてくださり、小さな2年生ができない棚を作ったり、害虫にやられていないかを注意深くみてくれたりした。子どもたちは一緒に作業をしながら、ふるさと先生の「かわいがってあげてほしい。いっぱい話しかけてほしい。そうすると、きっといっぱいゴーヤができますからね。」というゴーヤへの思いを受けとめ、世話をした。「ごーちゃん」「やーちゃん」と名前をつけて観察するとともに、生長の



ゴーヤ先生に感謝する会

様子を手紙に書いて、ふるさと先生に知らせた。「ぼく、ゴーヤ苦手……。」と言っていた児童も、収穫したゴーヤをジュースにして「おいしいね!」と飲むなど、ふるさと先生とのかかわりのなかで、ゴーヤへの思いを強くしていった。

「ゴーヤ先生に感謝する会」では、保護者にも協力してもらい、ゴーヤを使った料理を作り、ふるさと先生に食べていただいた。ふるさと先生からは、「この年になって先生と呼ばれてうれしいです。子どもたちに大切に育ててもらい、ゴーヤが市民権を得たようで何よりです。」の言葉をいただいた。

## (2) 「ふるさと講座」での学び

本校では、休日などを利用して「ふるさと講座」を設け、地域のよさや文化を学び継承する活動を行っている。この活動を通して、子どもだけでなく保護者とともに学ぶ機会をつくり、家庭や地域の教育力を支援していきたいと考えた。

5月には親子ふれあい活動として自然観察会を行った。学区の方をふるさと先生（森の先生）として、自然林と湿原植物の観察をしたり、小枝を使った表札作りに取り組んだりした。6年生の児童は「森を見学してわかったことがあります。それは、木をただ生やしっぱなしにするのではなく、切って整理してやるのが木にとってはよいことなんだということです。」と感想を述べている。この活動をきっかけとして、5・6年生は森への関心を深め、総合的な学習「作手の森を守れ!」に発展させていった。

このほか、ホテル観察会、サギソウ受粉活動、星空観察会、川遊び体験、三世代で語る会、秋の草花アレンジ、巣箱作りなどの講座を設けてきた。講師は、地元の方や保護者の



川遊び体験

方に務めていただき、参加者からは、「地元こんないいところがあるなんて知らなかった。」「作手がいかに自然に恵まれた所だったと改めて気付くことができた。」などの感想をもらった。昨年度からこれまでに18講座実施し、児童や保護者、地域住民など、のべ400名ほどの参加があった。

## ④ 個を強くする

どの学習を行うにも子ども一人一人が育っていないとできない。その上に質の高い学び合いが成立すると考える。そこで、「根拠をもって話す、友達の意見を取り入れ自分の考えをさらに深める」ことのできる児童を「強い個」ととらえ、一人一人に力をつける取り組みをしてきた。特に、思考力を高めるために、疑問をもち多面的にみたり、確かめたりする「みる力」を育成することに重点をおいた。また、みたことを整理したり、考えの根拠をはっきりさせたりするため、「書く力」の育成にも取り組んでいる。そして、学んだことやふるさとのために自分たちのできることを発信したり貢献したりする活動へとつなげていくようにしている。

### (1) 「みる力」=疑問に思ったことを調べたり、自分の考えを確かめたりする

1年生の生活科では「よくみて」「さわって」「よ



く聞いて」を合言葉に、牛とふれ合うことを目的に牧場見学に出かけた。大喜びで出かけて行ったが、大きな牛を目の前にして、怖くて近づけない子もいた。しかし、帰る頃には「牛さんにさわられてうれしかった。」と話し、たった1時間の見学にもかかわらず、40個以上の「はてな」や気づきをみつけることができた。



五感をはたらかせ「はてな」をみつける

みつけた「はてな」をクイズにし、「モーモークイズ大会」をすることを子どもたちに知らせた。すると、子どもたちは疑問に思ったことを自分の目で確かめるために、たびたび牧場を訪れた。それでも解決できないことは、ふるさと先生に聞いて答えをみつけた。疑問に思ったことをクイズにすることで、答えを一生懸命みつけ、牛への関心を深めた。繰り返し牛とふれ合ったことで、牛を怖がっていた子ども牧場に行くことを楽しみにするようになり、牛にさわったり餌をあげたりして、牛と友達になった。教室いっばいに貼られた子どもたちの牛の絵や「バター作り」の活動で、気分が盛り上がり、「うしうしサンバ」を歌って踊る活動にも発展していった。

## (2)「ひびきあう力」＝自分の考えの根拠をもち、相手を意識して伝えあう

「発言の3段階パス」ができること（関連の発言が

3人以上続くこと）、これがひびきあいの第1段階とした。そうすることで子どもどうしの発言を続けさせることを目指した。第2段階は、根拠にもとづいた発言である。根拠を言うことで、聞いている人が納得したり、反対意見を述べたりしやすくなる。第3段階は認め、修正する発言ができることである。「A君の言っていることはそうだけど……。」と相手の意見を認め、さらに受け入れて自分の考えを修正していくことを、子どもどうしのひびきあいと考える。

5・6年生は、総合的な学習で、地域の森について学習した。森林体験活動やふるさと先生の話を通し、地域の森の現状を調べ、森のどういう力（はたらき）を大事に守り、そのために自分たちにできることは何かについて思いを深めた。守っていききたい森について話し合いをしたときのことである。「動物の食べ物があるように、たくさんの種類の木がある自然林を守りたい。」というA児に対し、B児は「杉は家を建てるのに欠かせない木だから、人工林の杉林を守っていききたい。」と発言した。しかし、「動物は、人工林にもすめると思うけど、杉やヒノキには木の実がないから、自然林の方が動物には必要で、守らないといけません。」というC児の意見から、「木の実やえさになる葉っぱや草のことを考えていなかったの、自然林が増えて欲しいと思いました。」とB児は意見を変えた。A児も「さっき自然林が大切だと言ったけど、みんなの話を聞いて、両方とも大事だと思いました。」とB児の意見を受け入れ、考えを修正していった。

## (3)「発信する力」＝自分たちにできることを考え、地域に発信する

5・6年生は、総合的な学習で地元で盛んな肉牛の飼育について学習した。調べていくうち、「作手と牛はとてもよい肉なのに、売っている店は地元にはない、作手と牛のよさをみんな知らないのでは。」というA児の発言から、パンフレットを作り、地域の人にアピールすることにした。

# 「ふるさと学校」での学びを通して、「ふるさと作手」を愛する子を育てる



作成したパンフレット

作手と牛の魅力を伝えるグループは、言葉を簡潔にし、強調したい言葉をカラーにして、ブランド牛との比較を載せることを考えた。

完成したパンフレットは、保護者に配るとともに、道の駅「手作り村」の食堂にも置いてもらうことにした。食堂の方から「よく調べたね。私が知らないことがいっぱい載っているね。」とほめていただいた。そして、来店するお客さんによく見える入口付近にも、貼ってもらうことができた。

## (4) 個を強くするための土台づくり

個を強くするための土台づくりとして、児童一人一人の「みる」「書く」「聞く」「話す」力について、どのような内容を身につかせたらよいか観点別到達目標を設定し、段階表を作成した。その項目にそって、児童と教師が学期ごとに評価している。そして、全校の到達度を集計し、「どこまで達成しているのか。」「次の目標としたい項目は何か。」を職員で話し合い、指導の具体化や手立ての明確化を図つ

ている。「みる」という項目では、身のまわりのものに関心をもたせるため、季節感のあるものを掲示する、季節の変化や動植物・社会のニュースなどを話題にする、毎月「ふるさと発見ノート」を書くなどの手立てを講じている。

## 四 おわりに

「ふるさと学校」として家庭や地域の協力を得ながら研究を進めてきた。試行

錯誤の実践ではあるが、少しずつ成果が表れてきた。○平成21年度から、ふるさと先生として、のべ70名の方々に協力をいただき、地域の自然や人との絆を深めることができた。それにより児童のふるさとへの興味・関心が高まってきた。

○児童に、身のまわりや自然の変化に興味・関心をもち、自分から調べてみようとする姿勢がついてきた。また、発信・貢献する活動を通して、児童に自信がついてきた。

○保護者や地域の方がふるさと先生として来校することで、学校に対する理解が深まった。「ふるさと講座」などを通して、保護者の方にも学ぶ喜びや学ぶ姿勢が生まれてきた。また、ふるさと先生が足しげく通えるよう開かれた学校として、教師の意識も変わった。

課題もあるが、今後も一人一人の興味・関心を把握し、より確かな力を伸ばしていけるよう努めていきたい。そして、「ふるさと作手」に愛着をもち、将来作手を担っていく子どもたちを育てていきたい。

# 子どもの育ちと学びをつなぐ 保幼小連携をめざして

～がっこう だいすき～

兵庫県姫路市立手柄小学校教諭  
西口 広美

## ■ はじめに

新学習指導要領では、幼児教育との連携の観点から生活科を中心とした合科的な指導の工夫が望まれている。また、1年生を担当するたびに、就学前の子どもの育ちを入学後の学びへつなげていきたいという思いがあった。そこで、1年生1学期の始めに「がっこう だいすき」という単元を設定した。これは、定番となっている学校探検の活動を中心に、体育科・音楽科・図画工作科・国語科と合科的・関連的な指導を行い、探検で見つけたこと・感じたことを、子どもたちが入学前にお世話になった保育所や幼稚園などの先生方に伝えていこうというものである。

姫路市ではかつて、1つの小学校には必ず1つの公立幼稚園が設置され、交流を続けてきた。現在は、残念ながら少子化と価値観の多様化で閉園を余儀なくされたところが増えてきている。本実践を行った姫路市立城陽小学校の場合、隣接している城陽幼稚園と徒歩10分程度のところに城陽保育所があり、学校行事や生活科の授業で交流してきた。新入生93名はこのほかに、20ヶ所余りの私立幼稚園や保育所などから入学してきている（城陽幼稚園23名・城陽保育所34名・その他36名）。就学前の施設・設備はさまざまで、200人近くの幼児がいる保育所で「年長さん」として過ごしてきた子どもたちがいる一方、少人数の家族的な環境で生活してきた子どももいる。その現実を踏まえ、子どもの入学後の学びを重ねた姿をとおして、保幼小連携の手がかりをみつげていきたいと考えて取り組んだ。

## ☑ 取り組み

### (1) 単元名 「がっこう だいすき」

### (2) 単元設定にあたって

本単元は、新学習指導要領の内容「(1) 学校と生活」と「(8) 生活や出来事の交流」にもとづき設定した。小学校に入学して初めて出会う人や学校の施設・自然などと繰り返しかわり、そこで気付いたことや学校生活の楽しさを、身近な人々と伝え合う活動を行い、すすんで交流することができるようになることを目指している。

本学年の子どもは、入学当初より教師の話静静地に聞いたり、席について集中して作業したりできる子どもが多い。保育所や幼稚園などで、竹馬やけん玉遊びに挑戦し、時間をかけて練習すれば上達することを経験的に学んできている。新しい環境にすすんで挑戦していこうとする子どもが多く見られる一方、自分から人やものとかかわっていくことが苦手な子どももいる。

### (3) 単元の目標

○学校の施設やその周りの自然、学校生活を支えている人々や友達への関心を高め、楽しく学校生活を送ろうとする意欲をもつことができる。

○学校生活を楽しんだり学校探検で発見したりしたことを、身近な人々に伝えることができる。

○学校にはいろいろな施設や自然があり、学校生活を支えてくれている人々がいることに気付くことができる。

(4) 学習活動と評価計画

(全20時間)

学習活動	時	活動内容	☆他教科との関連	評価規準	〈方法〉
<b>第1次 学校探検に出発!</b>					
	1	教師と一緒に校庭や校舎の中を探検する。		【 <b>関・意・態</b> 】学校探検の約束を守って校庭や校舎などを探検しようとしている。 〈発言・行動観察〉	
	2				
	3		☆体育 ☆音楽		
	4	2年生と一緒に探検する。		【 <b>関・意・態</b> 】2年生と一緒に探検を楽しみ、出会った人にあいさつしようとしている。 〈発言・行動観察〉	
	5	学校探検を振り返る。		【 <b>思・表</b> 】探検をして見つけたこと・思ったことを絵や言葉で表現したり伝え合ったりしている。 〈発言・カード〉	
<b>第2次 もっと見たいな もっと知りたいな 学校のこと</b>					
	6	もっと見たいこと・知りたいことを話し合う。		【 <b>関・意・態</b> 】もっと学校探検をして調べたいという意欲をもつ。 〈行動観察〉	
	7	みんなで探検に出かけ、見つけたこと・わかったことを話し合う。		【 <b>関・意・態</b> 】校庭の動物や植物、学校の施設や学校生活を支えている人々とかかわろうとしている。 〈行動観察・発言〉 【 <b>思・表</b> 】探検をして見つけたことを絵や言葉で表現したり友達と伝え合ったりしている。 〈発言・ワークシート〉 【 <b>気付き</b> 】学校にはいろいろな施設や自然があり、学校生活を支える人々がいることに気付いている。 〈発言・ワークシート〉	
	8	○中庭・校庭			
	9	○パソコンルーム			
	10	○たんぼ学級・給食室			
	11	○用務員室・事務室			
	12	○スクールヘルパーさん ○校長室・音楽室など			
	13	「学校探検なかよし大作戦」をする。	☆国語	【 <b>関・意・態</b> 】あいさつ・自己紹介をしたあとサインなどをお願いして人とかかわることを楽しんでいる。 〈発言・行動観察〉	
<b>第3次 教えてあげたい 学校のこと「がっこう だいすき はっぴょうかい」</b>					
	14	学校探検でわかったことや思ったことを身近な人に伝える計画を立てる。	☆国語	【 <b>関・意・態</b> 】身近な人に何を伝えるか具体的に決めようとしている。 〈発言・行動観察〉	
	15	絵を使って伝える練習をする。	☆図工	【 <b>思・表</b> 】伝えたいことを大きな声で発表する練習をしている。 〈行動観察〉	
	16	招待状を書く。	☆国語	【 <b>思・表</b> 】招待する人のことを思い浮かべて、伝えたい気持ちを表現している。 〈カード〉	
	17	おうちの人を招待して「がっこう だいすき はっぴょうかい」1回めをする。		【 <b>思・表</b> 】学校生活を楽しんだり学校探検で見たりしたことを、身近な人々に伝えることができる。 〈行動観察〉	
	18	1回めの発表会を振り返り発表練習をする。		【 <b>気付き</b> 】うまくできたところと改善したほうがいいところに気付いている。 〈発言・行動観察〉	
	19	お世話になった先生方を招待して、「がっこう だいすき はっぴょうかい」2回めをする。		【 <b>思・表</b> 】学校生活を楽しんだり学校探検で見たりしたことを、身近な人々に伝えることができる。 〈行動観察〉	
<b>第4次 がっこう だいすき!</b>					
	20	学校探検や発表会を振り返り、がんばったことを話し合う。		【 <b>気付き</b> 】わかったこと・楽しかったことを振り返り、学校が大好きになったことや自分のがんばったことに気付いている。 〈発言・行動観察〉	



## ◀学校大好き発表会

### (5) 学習活動の実例

#### 第1次 学校探検に出発!

教師や2年生と一緒に学校探検をし、学校生活を楽しく送ることができるようにする。

入学式の日から、1年生の子どもたちは、小学校には何があるのだろう、どんな人がいるのだろうという思いをもっている。そんな子どもたちの思いを大切に「学校探検」を始めた。「どこに行きたい?」という問いに子どもたちは「おそと!」と答えた。保育所や幼稚園とは比べものにならないほど広い運動場、魅力的な遊具、生き物が見つかりそうな池や草むらがある中庭。そこに行って遊んでみたいという願いが一番であった。生活科の時間だけでなく、体育科の「ゆうぐあそび」でも遊びながら約束事を確認しつつ校庭探検を行った。次に、校舎内にも目を向けて、1年生が安心して学校生活を送るために必要な場所や人を探検した。音楽科で学習した「さんぽ」をテーマ曲に出かけたり「かもつれっしゃ」を歌いながら仲間づくりをしたりして子どもの意欲を高めていった。そして、学校生活に慣れてきたころ、2年生と一緒に探検する時間を設定した。それまでは教師主導であったが、自分の行きたいところへ2年生に連れて行ってもらい、そこで出会った人にあいさつしたり、探検のお願いをしたりする活動を取り入れた。2年生にリードしてもらいながら楽しく活動できた。

#### 第2次 もっと見たいな もっと知りたいな 学校のこと

学校にはいろいろな施設や自然があること、学校生活を支えてくれている人々がいることに気付く。

2年生との学校探検のあと、子どもたちのもっと知りたいという思いはさらにふくらんでいった。そこで、もう一度みんなで探検しようと話し合った。授業で使っていて入れなかったパソコンルームや「たんぽぽ学級」の友達が勉強している教室を見せてもらったり、用務員さ

んや調理員さん、事務員さん、スクールヘルパーさんにどんなお仕事をしているか話を聞いたりした。探検の後には必ず「みつけたよカード」を記録し、振り返るときの手がかりに残していった。最後に、子ども一人一人が、直接学校生活を支えている人とかかわることをねらって「学校探検なかよし大作戦」をした。国語科「はきはきあいさつ」の学習とも関

連付けて、あいさつや自己紹介をしたあとサインや握手をもらった。「校長先生と握手したら手があったかかったよ。」と報告してきたり、休み時間にも友達と一緒にサインカードをもって出かけて行ったりして、楽しみながら活動を続けることができた。



#### 第3次 教えてあげたい 学校のこと 「がっこう だいすき はっぴょうかい」

身近な人に学校探検で見つけたことや楽しかったことを伝えることができる。

活動のまとめとして、学校探検で見つけたことや楽しかったことを、おうちの人や保育所・幼稚園でお世話になった先生方に「学校大好き発表会」で伝えようと子どもたちに呼びかけた。「みつけたよカード」を見ながら、自分が伝えることを決めていった。発表することが決まると、図画工作科の「すきなえをかこう」の時間に絵をかいた。また、絵をかきながらつぶやいていることを、話型にあてはめて発表内容を指導した。これは国語科の「はなしたいな ききたいな」と関連できた。生活科の時間は絵を見せながら発表する練習をした。発表原稿を書くにはまだ十分に文字が書けなかったので、発表内容を覚えてしまう練習をと考えていたところ、子どもの中から画用紙の裏に発表する言葉を書いて練習する子が出

## 子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小連携をめざして

てきた。促音がぬけていたり、表記上の間違いもあったりしたが、子どもは学んだ文字を使って、自分が発表しやすいように工夫していたので、そこを認めて賞賛したところ、同じようにして練習することが広まっていった。発表会に向けて国語科「てがみをかこう」と関連させて招待状を書いた。城陽保育所からは5歳児の子どもたちが保育士さんたちと一緒に来てくれることとなり、子どもたちのやる気はさらに高まっていった。また、参加してくださる保育所・幼稚園の先生方には子どもたちの発表の後、感想やメッセージをお話していただくようお願いした。参観日に保護者に発表したときは、緊張感から大きな声が出ない子どももいたが、その反省を生かして練習を繰り返し、2回目の保育所や幼稚園の先生方に発表するときは、どの子も大きな声で堂々としっかりと発表できた。お世話になった先生方に、自分たちががんばっているところを見てもらいたいという思いが強くあったように思う。発表の後は、参観された先生方と話したり、中庭などへ行って自分が発表したものを実際に見てもらったりした。「上手に発表できたね。」と褒めてもらいながら、先生の手を引っぱって出かけていく姿は、ほほえましかった。保育所から来た5歳児達も顔見知りの1年生と一緒に校庭に出かけて行き、仲よく遊ぶ姿が見られた。保幼小連携に向けて子どもどうしの交流は自然にはじまっていた。参加された先生方にはアンケートをお願いし、授業の感想や就学前の生活の様子を回答していただき、連携に向けての手がかりをつかむことができた。

### 第4次 がっこう だいすき！

わかったこと・楽しかったことを振り返り、学校が大好きになったことや自分のがんばったことに気付く。

最後に活動全体を振り返った。「〇〇先生にふしぎな種のことを教えてあげたよ。」「どきどきしたけど、大きな声で発表できました。」と発表会でのがんばりも振り返った。

### ㊦ 成果と課題

○本単元では生活科を中心に合科的な指導ができた。これによって子どもの思考につながり、授業時数が有効に使えたので子どもたちがたっぷり活動に浸ることができた。本単元を手がかりに、スタートカリキュラムを作成していきたい。

○保育所・幼稚園等の先生方の感想に「1年生になった姿、授業に取り組む姿を見ることができてうれしかった。」「入学後3ヶ月でこんなに成長した姿が見られてうれしい。」といったものが多かった。また、「小学校入学までに身につけることは何か具体的に話し合いたい。」という意見もあり、保幼小連携の話し合いを始めるきっかけになった。アンケートでは、飼育・栽培の対象や遊具・遊びの種類などを尋ねた。集めた情報をもとに今後の学習に役立てたい。

○就学前の育ちと入学後の学びをつなぐことをめざして実践にあたってきたが、子どもたちがどのような経験をしているかを知ることが大切であると思った。その経験が小学校の学習にどのようにつながるのか、どのようにつなげられるかを今後も探していきたい。なお、本実践のあと、保幼小連携授業として2学期には、子どもをつなぐことをめざして「ふれあいむかしあそび」を実施した。これは1年生と保育所・幼稚園の5歳児でグループをつくり、地域の老人クラブの方と昔遊びを楽しむというものである。5歳児たちは、新年度には一緒に1年生として入学する仲間であり、顔合わせの機会にもしたかった。3学期には「ようこそ じょうようランドへ」を実施した。これは1年生が手作りおもちゃでお店やさんをして、保育所・幼稚園の5歳児を招待した。1学期から3回の交流ができた子どもたちは、小学校の環境にも慣れて、のびのびとした表情も見られ、小学校入学への不安も少なくなってきたようだった。

参考資料  
文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」(平成20年8月)  
平成21年度近畿地区小学校生活科教育研究協議会滋賀大会  
研究紀要/分科会提案収録



# 第9回 地球となかよし

## メッセージ 作品募集(2011年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、  
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

### 応募資格

小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

### 作品テーマ

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

### 応募期間

2011年7月1日～9月30日  
詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

2010  
入選作品

### 「ちきゅうも赤ちゃんもだいじ」



8月9日に、わたしのいもうとがうまれました。  
赤ちゃんは、まだおしゃべりできないし、あるけないから、パパやママがおむつをかえたり、だっこをしてくれています。わたしやおとうとがだっこをすると、にこっとわらいます。  
わたしたちがすんでいるちきゅうも、やさしくだっこしてあげるとわらってくれるのかな？

応募者全員に  
参加賞が  
もらえるよ

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね！

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

 教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6982 FAX 03-3238-6975  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2011年 春号】2011年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集部  
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光  
発行所：教育出版株式会社  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864(お問い合わせ)  
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003	札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011	函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014	仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011	名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056	大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051	広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004	松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒810-0001	福岡市中央区天神2-8-49 ヒューリック福岡ビル8F TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863
沖縄営業所	〒901-0155	那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411